



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2016.1 第62号



提◆言

イノベーションは一日にして成らず

一般財団法人生物科学安全研究所専務理事 濱岡 隆文
日本SPF豚協会SPF豚農場認定委員

一般社団法人日本SPF豚協会会員の皆様、この度、SPF豚農場認定委員会の委員に加えていただきました濱岡隆文です。よろしくお願ひいたします。これまで協会の皆様と親しく仕事をする機会にあまり恵まれませんので、少し自己紹介をいたします。昭和53年に農林省家畜衛生試験場（家衛試）に奉職、以来35年ほど細菌学、疫学を基盤に家畜衛生、家畜防疫といった分野で仕事をしてきました。現在は、一般財団法人生物科学安全研究所（安全研）で国等の調査事業に加え、動物用医薬品、飼料添加物等の開発支援の各種試験、農薬・化学物質の残留試験、環境影響評価試験等、畜産物・食品の安全確保のためのサルモネラ等の微生物試験から動物用医薬品・農薬の残留分析、さらに皆様に最も馴染み深い家畜やペット動物の微生物検査、PRRSや狂犬病の抗体検査など各種臨床検査まで、動物や人の健康、食の安全、環境保全といった幅広い受託試験・検査に携わっております。

さて、昨今社会を二分する騒動が、その1) 憲法論議を巻き込んだ安保法制の強行採決、その2) 私たちの生活に直接大きな影響を及ぼすにも関わらず国民への情報開示も拒み行われた環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)交渉の合意、その3) 米軍普天間基地の移設を巡る沖縄県と国とのし烈なせめぎあい。いずれも国の形を変えようかという大問題でありながら、議論のプロセス、中身ともに稚拙、とても民主主義を標榜し三権分立を擁する成熟した先進国の姿にはみえず残念でした。特にTPPは注視してきましたが、日本の農畜水産業の姿だけでなく地方の姿をも大きく変えると多くの関係者が口を揃えています。しかし、その中身については、政府、財界、新自由主義を標榜する経済学者の皆さん方は国の発展に欠かせないと言い、多くの農業関係者はじめ地方や農村の地域振興に関わる

様々なセクターの関係者は全く逆に危惧の念を示しています。どちらが本当か。私は、日本の国柄を守り、食と農を守り、農山漁村や地域を守る視点から考え、行動したいと思っています。

養豚は言うに及ばず畜産において、安全性を包含した品質の向上と生産性向上への努力は、これまでも、そして将来のTPP発効後も変わることのない私たちに課された命題です。これには多くの関係者が様々な切り口から取り組んできました。SPF豚技術をツールとして取り組んできたのが協会に集う皆さんです。釈迦に説法で恐縮ですが、日本におけるSPF豚作りの取り組みは、古く1963年に遡ります。米国で報告されたSPF豚作出技術を端緒として家衛試で技術開発が始まりましたが、その秀逸性は、微生物を制御した高品質な豚を実験動物としての価値だけでなく、当初より産業利用をも目標に据えた、今の言葉でいえば常にイノベーションを目指した点でした。しかし、国の研究予算を使って作った豚を民間業者が使うわけですから、当時は霞が関から相当な逆風を受けたと聞いています。この研究リーダーが故波岡茂郎先生（後に北海道大学獣医学部教授）、最若手でチームを支えたのが柏崎守先生（元家衛試場長、現協会SPF豚農場認定委員長）でした。昨年は1965年に家衛試で実際にSPF豚生産が開始されて50年の節目でした。SPF養豚はイノベーションを目指して半世紀、まさに、イノベーションは一日にして成らずですが、多くの先人の努力によりバイオセキュリティの徹底による高生産性技術として定着し、今日母豚数でシェア9%と聞いています。TPP発効を見据えた更なる技術革新と普及にも期待しつつ、また、その昔に家衛試のSPF施設で子宮切断術に動員され、オペのタイムキーパーを手伝った記憶を辿りつつ拙文の筆をおきます。

表彰農場の事例発表、 6次産業化の取り組みの紹介など

SPF豚セミナーを開催

昨年11月5日、東京都千代田区のKKRホテル東京において、SPF豚セミナーが開催されました。参加者は110名でした。内容は毎年行なわれているCM農場の生産成績年次報告、生産成績優秀農場表彰のほか、表彰農場の事例発表や、ファンドを活用し6次産業化を目指す認定農場の取り組み事例などが報告されました。以下にその概要をご紹介します。

●生産成績最優秀農場表彰（今年で9回目）

◆総合生産成績部門

最優秀賞：(有)サクセス森
(北海道、2年連続2回目)

高瀬幸巳代表取締役

「設立当初から指導者の教えをよく聞き、忠実に守ってきた。特段目新しいことをやっているわけではなく当たり前の事を当



(有)サクセス森社長・高瀬幸巳さん

たり前にやってきただけ。ただし、迷った時は原点に返り、基本を忠実に守るようにしている」。

◆商品化頭数部門

最優秀賞：(農)八幡平ファーム(岩手県、2年ぶり3回目)



(農)八幡平ファーム組合長
阿部正樹さん

阿部正樹組合長

「今回の受賞は日々の努力の結果であり、現場職員の活力になっている。

我々の目指している美味しい豚肉作りは、豚を健康に育てることが基本。いま飼育している多産系の母豚は、30頭離乳を予

感させる。さらなる飛躍を目指したい」。



●事例発表●高成績を上げるためのポイント 気をつけていること①

(有)サクセス森・高瀬幸巳代表取締役（北海道森町）

安定した生産を持続するため、ハイレベルな管理の平準化の実現と、食の安全を目指して日々努力している。SPF養豚を選択したのもその一つである。

達成可能な数字目標を掲げ、確実にクリアする。劇的な改善を目指さない。

ウィークリー管理で分娩週16腹を基本とし、作業の集中化を図っている。

再帰発情日数は7日以内が83%以上で、良好と考えている。分娩後の母豚は朝夕2回給餌で、早めに飽食に持っていく。産歴にこだわらず、残餌がなければ増加、残していれば減少を繰り返し、しっかり食べさせるようにしている。

母豚の乳房消毒は確実に実施するようにしている。離乳子豚は21.8日で体重7.46kg。

子豚の飼養管理のポイントは①生後1週目までは「えつけトレイ」にて給餌、5～6日で子豚用フィーダーに変更、②虚弱豚、乳の摂取不足の子豚には、ニューピグメイト・エネアップの給与やアリナミンを3日間注射、③里子を積極的に行ない1母豚の子豚数を10頭に揃える。

里子の出入りが無い母豚は18%、5頭以上出入りがある母豚は14%位である。

作業効率を考えた施設の改造や、夏季の母豚に冷凍ペットボトルでのドロップクーリングを行なうなど、

創意工夫している。2か月に1度、目標の進捗状況確認と農場の現状把握のための生産技術検討会を実施している。

オールラウンドプレイヤーを育成するために、従業員同士の情報共有を重視している（誰にでも相談できる、活動しやすい環境作り）。

これからも「豚に優しく、人にも優しい」経営を目指したい。

●事例発表●高成績を上げるためのポイント気をつけていること②

(農)八幡平ファーム・橋場昭文場長（岩手県洋野町）

①介護分娩の実施（離乳頭数の向上）

2人体制、16：30～22：00作業（夕食付）。ウィークリー管理、毎週水曜日のみ実施。30分おきに分娩頭数を確認し、早期対応を心がける。分娩室はコルツヒーターで加温（室内の空気を汚さないため）。虚弱豚のみ、初乳を飲ませた後、アーリースタート（藤田製薬）を2日間投与する。結果、離乳頭数が1腹当たり0.5頭増加した。



(農)八幡平ファーム場長
橋場昭文さん

②自家取りAIの実施

毎週月・水に作成、2人体制で作業。希釈精液（全農畜産サービス製？リターマックス）は、恒温機で一晩かけて27℃から17℃まで下げる。交配作業を容易にするため、ストールの母豚を前に来させ、餌を少し与える。

③多産系母豚への対策

最低8産まで持たせるため、分娩負担を極力減らす努力をする。授乳期の飼料は、母豚回復のためにたんぱく質を高めにするが、子豚の下痢対策としてカロリーは変えない。泌乳量をダウンさせないためにリジン0.9%を維持している。里子を積極的に採用しているが初乳は飲ませる。離乳頭数は初産10頭未満、2産目は11頭未満とする。また、廃用予定母豚を利用する。

④リキッドフィーディングと肥育豚

リキッドフィーディングは68日齢以降に実施。それ以前はマシンガンフィダーでクランブルとマッシュ飼料を給与。飼料：水は1：4。水と混ぜても固形物が

沈澱しにくい飼料を使用している（パイプのつまりがない）。体重測定は週に750～800頭、全頭1頭ずつ測定。

「商品化頭数アップ・うまい豚肉・無公害」に執着する養豚を目指している。

●講演●認定農場におけるファンドを活用した6次産業化の取り組み

(株)ひこま豚・日浅順一社長（北海道森町）

認定農場：(有)道南アグロ（森町、母豚800頭規模）

父の経営する農場産豚肉の値段を自分たちで決めたい、お客の声を直接聞きたいという思いからブランド名の会社を設立、直売所「ひこま豚ファーマーズショップ」（販売・



(株)ひこま豚社長・日浅順一さん

イートイン）を立ち上げた。その後「農林漁業成長産業化支援機構」（A-FIVE）のサブファンド「北洋6次産業化応援ファンド」の勧めでファンド活用を決め、道内畜産第1号として採択された。

ファンド活用のメリットとして、①月次報告義務（決算表、資金繰り表、通帳コピー等）により店の状況把握ができる②経営分析の助言があり、経営改善につながる③ファンドから経営に役立つ情報が提供される④ファンド側からのプレスリリース等がひこま豚の知名度アップにつながる、などがある。

農場の収益向上が重要であることから、仕入価格は年間平均相場価格+40円で固定している。5か年計画の目標は、売上高1億1,700万円、経常利益1,000万円、純利益600万円である。

大切にしていることは、①人材（肉や料理のプロの入社が売上アップの要因、信頼できる人がいてこそその経営）②常に相手の立場に立った接客を心がける③地元密着（地産地消、オープン前の地元店食べ歩き、地元限定の還元セールなど）④生販の一体感（農場スタッフとの交流会）⑤ブランド堅持に徹する（売り込みはしない）、などである。

取扱量は現在農場出荷頭数の約7%だが、最終目標は全量(年間18,000頭)を自分たちで販売することである。

豚流行性下痢と伝染性胃腸炎 (2)

豚流行性下痢 (PED) と伝染性胃腸炎 (TGE) の対策には早期発見、早期通報、そして防疫対策が大切です。そのためには、PEDとTGEの病性や国内外での発生状況について地域内で知識と情報を共有すること、個々の農場で日頃から衛生管理を徹底すること、そして発生時に総合的な防疫対策がとれるよう農場、行政、そして養豚関連機関で日頃から連携を構築しておくことが必要です。

なかでも個々の農場で実施する衛生管理は農場へのウイルスの伝播を断ち切る防衛ラインとして非常に重要な役割を果たします。その具体的な実施方法は平成26年10月に農林水産省より発表された「豚流行性下痢 (PED) 防疫マニュアル」(http://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/ped/pdf/ped_manual_set.pdf) に記載されていますので本稿では割愛させて頂き、衛生管理の実施に不可欠である感染動物からのウイルス排泄動態や環境下での生存性などの知見について、近年知見が蓄積されてきたPEDを例としてご紹介いたします。

PEDウイルスに感染した豚は感染後1～4日で発症し、糞便中ウイルス遺伝子量が最高 $10^9 \sim 10^{13}$ copy/gとピークに達します。哺乳豚と肥育豚とで発症極期の糞便1gあたりのウイルス遺伝子量に大差がないことから、糞便排泄量の多い肥育豚でPEDが発生するとその糞便は大きな感染源になると考えられます。また、回復し症状が消失してもウイルス遺伝子は糞便中で感染後最長7週目まで検出されています。種豚候補豚や肥育豚を導入する際には、少なくとも8週間は隔離期間を設け農場の豚へのウイルス伝播防止を図る必要があります。なお、排泄されたウイルスは糞便に保護され環境下で長期間感染性を保ちます。米国の調査では、PED発生後4ヶ月が経過した豚舎のピットより感染性のウイルスが検出されたとの報告もあります (AASV PED research, #14-246)。このことから、発生時のみならず終息後も継続して糞尿および糞尿が付着した汚染媒介物を介したウイルス伝播に注意が必要と言えます。こ

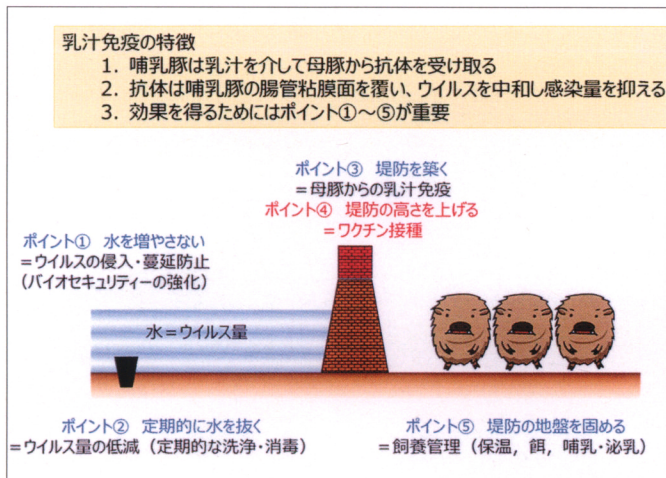


図 乳汁免疫の特徴とポイント

のような知見を積み重ね衛生管理の根拠とすることで、より効果的かつ効率的な対策につながると考えられます。

また、ワクチン接種もPEDとTGEの予防と被害低減に有効です。PEDとTGEのワクチンは、分娩前の妊娠豚へワクチンを接種し、その免疫を分娩後に乳汁を介して哺乳豚へ賦与する、いわゆる乳汁免疫に基づいています。ワクチン接種により乳汁に誘導された抗ウイルス抗体は、哺乳豚が頻りに乳汁を接種することで腸管粘膜表面を覆い、腸管に侵入したウイルスを中和して感染量を低減させ、哺乳豚での発症を予防または軽減します。この乳汁免疫を有効とするためには飼養衛生管理が不可欠です。すなわち、乳汁免疫の哺乳豚への効果は図に示したような堤防とダムの水の関係にたとえられます。いくらワクチン接種などで堤防 (乳汁免疫) を高めても、水 (ウイルス量) が増加し堤防を越えると哺乳豚はウイルスに感染し発症します。そのため、ワクチン接種と合わせて、日頃の衛生管理によりウイルス量を低減させつつ、ウイルスの侵入・蔓延防止対策を実施することがワクチン効果の発揮に不可欠です。また、安定した堤防を築くためには、安定した地盤の構築、すなわち母豚がきちんと泌乳し哺乳豚がそれを継続して吸飲し続けられるような飼育管理の実施も必要です。(以下次号)

中型ほ乳類の侵入を防ぐ

岐阜大学応用生物科学部特任助教 森部 絢嗣

豚野生鳥獣が畜舎へ侵入する主な目的は、高栄養の配合飼料を食べるためです。これらの侵入を防ぐためには、侵入口をひとつひとつ無くしていく必要があります。中型哺乳類の中でもハクビシン（図1）やアライグマは、登攀能力に優れ、住宅地等においては人家の屋根裏に棲み込み、糞害等を与えています。当然、豚舎にも棲み家として侵入する可能性があります。両種の対策の場合、地上部のみならず、屋根付近の隙間にも気を付ける必要があります。特にハクビシンは中型哺乳類の中でも立体的な活動を得意とします。たとえば、直径1mm以下の針金の上を綱渡りしますし、25cm幅の壁間の隙間を垂直に登ることもできます（江口2013）。すなわち、豚舎へつながる電線や壁などの隙間があれば、屋根へ渡り、豚舎上部からも侵入できます。鳥類であれば、細かいネットを畜舎に被せることで侵入を防ぐことができますが、ハクビシンやアライグマは、ネットを破いてしまうため、頑丈な金属素材を用いる必要があります。

江口（2013）の実験によるとハクビシンは、成獣でも6cm×12cmの穴（iPhone5ぐらい）があれば侵入するため、豚舎中の隙間をそれ以下の大きさにする必要があります。地上付近からはイタチやテンの侵入もあるため、隙間はさらに細かい金属メッシュ等で覆います。また木材に隙間がある場合、削って隙間を広げて侵入



図1. 箱わなで捕獲されたハクビシン

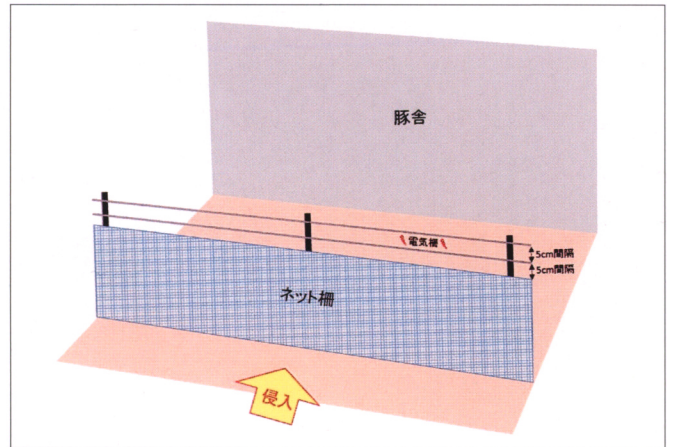


図2. 中型哺乳類侵入防止策の一例

することがあるので事前に塞いでおきます。

豚舎自体を隙間なく対処できない場合は、イノシシ等と同様に電気柵を用いることで侵入を防ぐことができますが、中型哺乳類用の電気柵ワイヤーは、1本目を地上から5cm、2本目を10cmの高さで張る必要があります。この高さだとすぐに雑草が触れて漏電したり、地面の凹凸に合わせられなかったりと現実的ではありません。そのため、豚舎全体をネット柵と電気柵を併用した柵で囲うことで効果的に侵入を防ぐことができます（図2）。この柵は、ネット柵の下部を侵入側の地面に埋めることで下からの侵入を防ぎ、柵を乗り越えようとした中型哺乳類へは、電気柵でショックを与える仕様になっています。詳しくは、参考文献（江口2013）をご覧ください。もちろん柵自体も隙間がないように施工します。地面がコンクリートやアスファルトの場合、電気柵の効果が弱くなるため、導電性のネットを用いる必要があります。またこの形式の柵は高さや材質を変更することで、イノシシやシカ等の大型獣にも対応できます。

一度侵入を許してしまった個体については、トレイルカメラを使い、棲息状況や行動を確認し、市町村から捕獲許可を得た上で捕獲します。（以下次号）

<参考文献>

江口祐輔（2013）最新の動物行動学に基づいた動物による農作物被害の総合対策. 誠文堂新光社. 173 pp.

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

ちくさんフードフェアに6度目の出展 例年同様しゃぶしゃぶ試食が大好評

協会では昨年10月10日（土）、11日（日）の2日間、「ちくさんフードフェア」（神奈川県川崎市、主催：(財)日本食肉流通センター）に、5年連続6回目の出展をいたしました。お天気がやや不安定だったせいか、過去最高を記録した前回は下回ったものの、2番目となる12万8,000人の人出となりました。

協会では、恒例のしゃぶしゃぶの試食後のアンケート調査を実施、回答いただいた人を対象にSPFポークの加工品が当たる抽選会を行ないました。また、SPF養豚の仕組みや認定農場マップ、認定シールや農場銘柄シールなどを紹介したパネルおよびポスターを展示、SPFポークリーフレットも配付しました。

しゃぶしゃぶの試食は相変わらずの大人気で、協会ブース前には試食開始時間前から何重もの長蛇の列が、1日5回の試食もあつという間に終わる状況でした。

また、今回も東京農業大学の女子学生の皆さんに豚の着ぐるみ担当をお願いしましたが、さすがの軽快な



動きでご活躍いただきました。特に子どもたちには大人気でした。

アンケート結果によると、SPFポークの認知度もあがっています。引き続きこのような取り組みを続けたいと思います。遠方より会場にお越しいただいた方々、休日にご協力いただいたピラミッド・関係者の皆さん、ありがとうございました。

●協会からのお知らせ●

●認定委員の退任

協会SPF豚農場認定委員会の学識経験者委員の三上仁志先生が、このたび委員を辞任されることとなりました。先生は家畜育種学がご専門ですが、薔薇の育種の分野でも大変有名な方です。先生には10年以上にわたる大変長い間認定委員をお務めいただき、大所高所からのご意見、ご指導を賜りました。大変お世話になりました。ありがとうございました。

●セミナーご参加ありがとうございました

2～3ページでご紹介しております11月5日のセミナー、終了後同会場で開催された懇親会にも約100名の方にお集りいただきました。恒例のSPFポークのしゃぶしゃぶや骨付きハム（ひこま豚提供）、ウインナー

などの加工品（厚木ハム製）をご賞味いただきながらの情報交換の場となったかと思います。表彰農場、講師はじめご出席いただいた方々、ご協力いただいた各ピラミッドの皆さま、ありがとうございました。

●SPFポークリーフレットご活用ください

SPFポークリーフレット（A6判見開き4ページ、一部改訂）を認定農場やSPFポーク取り扱い店などには無料で差し上げております。販促資材としてご活用下さい。ご希望の方は協会事務局（TEL.03-5835-5375）までお問い合わせください。

<編集部より>

都合により、「プロのシェフおすすめ、かんたん、おいしいSPFレシピ」は休載します。

紹介●SPFのお店25

わったいな肉工房

鳥取県鳥取市賀露町西3-323 TEL/FAX.0857-50-1929
http://sanroku36.com

「わったいな」とは鳥取県東部地方の方言で、「すごい」という感動や驚きを表わす言葉だそうです。「地場産プラザわったいな」は、鳥取県の食の情報発信拠点として平成23年にオープンしたJAグループ鳥取の直売所です。その中の精肉コーナーが「わったいな肉工房」。鳥取県畜産農業協同組合（TORICHIKU）の直営店です。

鳥取県といえば鳥取系という血統が全国に名を馳せた伝統的な和牛産地。店舗グループマネージャーの武上淳さんによれば牛肉と豚肉を食べる割合は2対1だそうです。

そんな店舗の豚肉でメインとなっているのが、県内唯一の認定農場である、株式会社西日本ジェイエイ畜産の直営農場2農場産SPFポークです。

バイヤーである武上さんはSPFポークについて「消費者の評判はとてもいいですよ。特に冷めてもおいしいとの評価が高いです。精肉は肉色が重要なポイントになりますが、その点でも問題ないです」。

高い評価を得ていますが、SPFポークの認知度アップのため、パネル等も作成しショーケースに展示、わかりやすい説明で消費者にアピールしています。「SPFというと、どうしても国産なの？と言われることもあるので、理解してもらう努力が必要



左から、鳥取県畜産農業協同組合店舗グループマネージャー・武上淳さん、わったいな肉工房従業員の山根淑子さん、同店長の前田直巳さん



だと思えます」。そのパネルには、しっかりと協会の認定マークが。「アピールできる



資料があればどんどん活用したいですね」と言っていただきました。

●認定情報●

●平成27年度認定農場

[12月認定]

(有効期間:平成27年12月10日から28年12月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワイン・ステーション、(有)道南アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)山中畜産千歳農場、(有)サクセス森、(有)中多寄農場、青森県・(有)ふなばやし農産、同第3農場、神明畜産(株)八戸ファーム、岩手県・(有)ケイアイファウム玉山農場、斉藤SPF農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、北日本JA畜産(株)本社農場、(農)八幡平洋野牧場、秋田県・(有)ポークランド、(株)ユキザワ雪沢農場、山形県・(有)最上川ファーム、宮城県・(株)しまぎき牧場蔵王高原農場、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)ユキザワ玉川農場、茨城県・(有)常陸牧場、群馬県・(有)長谷井畜産、ピッグ

ファームゴカン、利根沼田ドリームファーム(株)、千葉県・(株)愛東ファーム銚子農場、同東庄農場、綱島良信養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)菅井物産SPF農場、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、広島県・(株)広島ポーク、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、(株)ユキザワ丹原農場、大分県・JA北九州ファーム(株)直入農場、同安岐農場、長崎県・(有)芳寿牧場口之津農場、同国見農場、同高原農場、同新島原農場、同新国見農場、(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、宮崎県・江夏商事(株)夏尾農場、(有)ナガトモ、鹿児島県・(有)サツマ湧水事業所、(株)シムコ鶴田事業所阿久根農場、そお元気ファーム(株)持留農場、同久保崎農場(以上49農場)

※次回認定委員会は平成28年3月10日(木)の予定



(有)東海ファーム
高木 敏行さん
●千葉県東庄町

天性のリーダーシップで仲間を引っ張るカリスマ会長

千葉県東庄町といえば、全国でも有数の養豚密集地で、協会認定農場も多数あります。

高木さんは地域でもいち早くSPF豚生産を始めた一人、25年前に仲間と3人で「東庄SPF豚研究会」を立ち上げました。10年後「東の匠SPF豚研究会」に発展、現在会長として、12名のメンバーで地元ブランドとしての生産・販売に取り組んでいます。平成26年度全国優良畜産経営管理技術発表会において農林水産大臣賞を受賞するなど、大きな成果を挙げています。

高木さんは農家の跡取り、地元農業高校に進学しましたが、卒業後すぐに就農するのも…と、県の農村中堅青年養成所(のちの農業者大学校)に入学しました。

養成所は全寮制の2年制、2年目に行なわれる県外派遣研修が豚との出会いでした。授業で県内の花き農家で研修した時は「どうも向いてないな」と思った高木さん、遠く離れた福岡県の養豚研修を選びました。

研修先はブリーダー会社の農場、社長がやり手で当時阿蘇のふもとに観光牧場を自ら建設、高木さんも養豚研修のかたわら現場に泊まり込み手伝ったそうです。その時の経験が後に自分の農場を作る際に大いに役立ったのだとか。「面白いと思いましたね。人を使って計数管理する大切さを勉強しました」。6か月間の農場研修中は作業のすべてをノートに記録したそうです。



研修から戻るとすぐに「豚を飼う」と宣言、自宅に施設をつくり肉豚生産を始めました。「基礎工事以外は全部自分でやりましたよ」。母豚100頭規模の一貫経営を経て、35年ほど前に海上町(現旭市)に農場を新設。「東庄から海上へ」で東海ファームという農場名にしました。現在は繁殖1、育成1、肥育2の3サイト農場として母豚1,000頭規模の大型農場です。

グループの会長として心がけているのは「我田引水はしない」「自分のいいところを公表する」「明快な方向性を打ち出しぶれないこと」だそうです。「まとめるのが向いているのかな。一人では戦えないからね」と高木さん、おじゃました日も農場新設を計画している若手メンバーに熱心にアドバイスされていました。長男の強志さんが後継者として農場業務に携わっていますが、地元の相談事も多く、趣味のゴルフもなかなかできない忙しさとか。それでも年に1度、研究会主催コンペは盛大に開催するそうです。

「後ろを振り返ったことはないな。障害が大きいほど乗り越えたいくなる。発展あるのみですよ」。リーダーシップ溢れる言葉の数々に、たくさんの元気をいただきました。(編集部)

編集後記

新年明けましておめでとうございます。昨年の杭打ちデータ改ざんには驚くとものがっかりです。つくり手のプライドはどこにいったのでしょうか。私たちには消費者に安心しておいしく食べてもらえる豚肉をつくる責任があります。TPP発効後の価格競争に巻き込まれない覚悟で、SPF養豚に自信を持って今年も取り組んでいきましょう。また、最近人における耐性菌問題が話題になり始め、畜産・水産業で扱う抗菌性物質がクローズアップされそうです。A分類薬品費をさらに低減させる工夫を考え、実行しましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第62号 2016年1月1日発行(季刊)

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀